

## ぱたから・ぱたから

谷田貝常夫

最近耳にせることなれど、老人のための健康クラブにて推奨せる呪文あり、「ぱたから・ぱたから」と唱ふれば「誤嚥の防止に役立つ」とのことなり。然聞きてネットにて調ぶるに、口腔ケア、歯科、皮膚科などにて効果ありと唱へる器具種々ありて、パタカラなる名にて販賣されぬたり。さらには養老院などにて、パタカラ體操など行なはるも知る。物を口中に取込み、口の奥に運び、吞込む、そが一聯の動作を恙なく行なはむがために有用なる訓練なりとの解説あるも、そこまでにて終はれり。

似たる發音もつ成語に「ふつくちき」あり。この語、不可思議なる事に最大の國語字書「日本國語大辭典」にも見られざるところ、ぱたから同様、呪文的といへむ。銜學的なる穿鑿に忸怩たる場所あれど、本居宣長に先立つ伊勢は津の國語學者谷川土清こしずかが「和訓栞」わくんのしをりにこの語あるを知る。土清、日本語は元來一音の語なれば「捨て假名」とて、「いむむふつくちき」は讀まなかりし事ありといふ。例はば、納を「な」(ふ)、乙を「お」(つ)、作を「さ」(く)、吉を「き」(ち)、役を「え」(き)と讀む類を指すとす。この讀まざる捨て假名に「ふつくちき」現はる。一方、高島俊男が著、「不器用なる日本人」によれば、漢字音には聲調なるものあれど、日本人には發音できず字音よりは消え去りしが、それが例外は中古漢語の入聲にっしやうと稱さるる聲調にて、韻の末尾の p・t・k に終はりたるものものを學者が名附けたるものなり、一般人はフツクチキと呼ぶと言ふ。これ、蝶(てふ)、別(べつ)、菊(きく)など、日本に残りて、現代中國語には失はれたる貴重なる發音、化石の漢字音なり。

ここに現はれたる p・t・k、以前の日本人なればフツク、現代なればプ・トウ・クなどと發音さるるローマ字表記の意味するところ如何といふに、共通の特徴は「破裂音」なるところにあり。發聲の部位も加ふれば、p は一旦上下の唇を合せおきてからの兩唇破裂音、t は舌を齒莖につけおきてからの破裂音、k は口蓋の奥による破裂音なり。しかも聲帶を震はすことなき「無聲音」、それを總合して言はばいづれも發音にあたり、一番筋肉を強ひる聲なり。とかく日本人は筋肉を使ふを惜しむ怠惰なる發聲をするとは、演出家福田恆存ならずとも大方の指摘するところなり。歐米人の聲出だす折、脣周邊を大きく動かすに日本人驚かさるるが、わが家内の證言によれば、フランス人教師、日本人生徒の口開け少なきに激して「ミユスケル muscler(筋肉に力入れよ)と叫ぶことありたる由。

かくてパタカラ、一字づつ明瞭に發聲することにより、口腔、聲帶あたりの筋肉を鍛へ、誤嚥の機會を減らすに效用あらむこと、容易に推測せらるるなり。死亡通知に肺炎とあるを見る度に、これ誤嚥より誘發されし肺炎ならむかと想像せる余、向後は念佛となふるより、パタカラパタカラの呪文唱へむ。

